

やさし蔵人

大納言なりける人、小侍従と聞こえし歌詠みに通はれけり。ある夜、もの言ひて、暁帰られけるに、女の家を遣り出だされけるが、きと見返りたりければ、この女、名残を思ふかと思しくて、車寄せの簾に透きて、一人残りたりけるが、心にかかりおぼえてければ、供なりける蔵人に、「いまだ入りやらで見送りたるが、ふり捨てがたきに、何とまれ、言ひて来。」とのたまひければ、ゆゆしき大事かなと思へども、ほど経べきことならねば、やがて走り入りぬ。車寄せの縁の際にかしこまりて、「申せと候ふ。」とは、さうなく言ひ出でたれど、何と言ふべき言の葉もおぼえぬに、折しもゆふつけ鳥、声々に鳴き出でたりけるに、「あかぬ別れの」と言ひけることの、きと思ひ出でられければ、

物かはと君が言ひけむ鳥の音の今朝しもなどか悲しかるらんとばかり言ひかけて、やがて走りつきて、車の尻に乗りぬ。

家に帰りて、中門に下りてのち、「さても、何とか言ひたりつる。」と問ひ給ひければ、「かくこそ。」と申しければ、いみじくめでたがられけり。「さればこそ、使ひにははからひつれ。」とて、感のあまりに、しる所など賜びたりけるとなん。この蔵人は内裏の六位など経て、「やさし蔵人」と言はれける者なりけり。

【口語訳】

(当時) 大納言であった人が、小侍従と(人々が) お呼びした歌詠み(のもと) に通いなされた。ある夜、親しく過ごして、暁に帰りなされた時に、女の家の門を(牛車を) 出して進ませなされたが、ふと振り返ったところ、この女が、名残を(惜しいと) 思うのかと思われて、車寄せの簾に透けて見えて、一人残っていたのが、(大納言は) 心にかかり感じられたので、供であった蔵人に、「まだ(奥へ) 入ってしまわないで見送っているのが、ふり捨て(て帰り) がたいので、何であれ(ふさわしいことを)、言ってこい。」とおっしゃったので、(蔵人は、) 並々でない大事だなあと思うが、時間が経ってよいことではないので、すぐに(家に) 走って入った。車寄せの縁の端に慎んで座って、「(主が、私から) 申し上げよとのことでございます。」とは、あれこれ考えることなく言い始めたが、何と云うのがよいという言葉も思い浮かばないが、ちょうどその時鶏が、声々に鳴き出したところ、(かつて女が和歌を詠んで) 「あかぬ別れの」と言ったことが、ふと思い出されたので、

問題になるか、いやならないと、あなたが言ったとかいう鳥の声が、今朝はどうして悲しいのだろうか。とだけ(歌を) 詠みかけて、すぐに走って追いついて、牛車の後ろに乗った。

家に帰って、中門で下りて後に、「ところで、何と言ったのか。」と(大納言が) 問いなされたので、「このように(申し上げました)。」と(蔵人が) 申し上げたところ、(大納言は) たいそうすばらしがりなされた。「それだから、(考慮してそなたを) 使いにした。」と言って、感動のあまりに、領有する所などをお与えになったと(いうことだ)。この蔵人は内裏の六位などを経験して、「やさし蔵人(優美な蔵人) 」と言われた者であった。